

第 1 1 回教育委員会（臨）

開会日時 令和 7 年 5 月 2 6 日（月） 午後 6 時 3 0 分
閉会日時 午後 7 時 0 5 分
開会場所 教育支援センター

出席者

教 育 長	長 沼 豊
委 員	小 林 美 香
委 員	野 田 義 博
委 員	善 本 久 子
委 員	山 口 謠 司

出席事務局職員

事務局次長	林 栄 喜	地域教育力担当部長	金 子 和 也
教育総務課長	久保田 智恵子	学 務 課 長	小 林 晴 臣
新しい学校づくり課長	柏 田 真	学校配置調整担当課長	野 崎 友 輔
施設整備担当副参事	彼 島 勲	生涯学習課長	池 田 雄 史
史跡公園担当課長	品 田 真 希	地域教育力推進課長	高 木 翔 平
教育支援センター所長	石 野 良 恵	中央図書館長	山 田 綾 子

署名委員

教育長

委 員

【第一部】第 1 1 回教育委員会

午後 6 時 3 0 分 開会

教 育 長 皆様、こんばんは。板橋区教育委員会、教育長の長沼でございます。

開会に先立ちまして、私から、一言、ご挨拶を申し上げます

皆様には、日頃より、板橋区の教育行政にご理解とご協力をいただきまして、誠にありがとうございます。

教育委員会は、教育長と教育委員 4 名で構成する合議制の執行機関でありまして、月 2 回ほど、定期的に会議を開催して、教育行政の運営に関する基本的な方針や重要な事項について、審議、決定をしております。

今回は、「身近な教育委員会」として令和 7 年第 1 回の会議を開催いたします。

ここからは着座にて失礼いたします。

それでは、委員の紹介をいたします。

小林教育長職務代理者でございます。

野田委員でございます。

善本委員でございます。

山口委員でございます。

本日は、4 名の委員の出席を得ましたので、委員会は成立しております。

それでは、ただいまから令和 7 年第 1 1 回の教育委員会を開催いたします。

本日の会議に出席する職員は、林次長、金子地域教育力担当部長、久保田教育総務課長、小林学務課長、柏田新しい学校づくり課長、野崎学校配置調整担当課長、彼島施設整備担当副参事、池田生涯学習課長、品田史跡公園担当課長、高木地域教育力推進課長、石野教育支援センター所長、山田中央図書館長、以上、12 名でございます。

本日の議事録署名委員は、会議規則第 2 9 条により、山口委員にお願いいたします。

また、本日は多くの方に傍聴にお越しいただいておりますが、会議規則第 3 0 条により許可しましたので、お知らせいたします。

本日の会議では、「不読率の改善～心を育む読書の大切さ～」を報告事項とし、意見交換を行っていきたいと思います。

第一部に入ります。

それでは、早速ですが、「心を育む読書の大切さ」について、山口教育委員より報告願います。

山 口 委 員 こんばんは。どうぞよろしくお願いいたします。

皆さん、この夕方に、パッションがありますね、情熱ですね。

「情熱」という、「パッション」という言葉を、皆さんにお配りした紙があると思いますけども、下の方に「パッション」と書いてありますが、反対にパッションの反対、上の方の真ん中のところに書いてあると思います、「R I S K」と書いてありますが、リスクという、リスク回避という言葉をよく使う、最近よく

使われるんだらうなと思いますが、リスクということは、皆さん、どういう言葉か、本当は、ご存じですか。

リスクを回避するという言葉、リスクという言葉は、もともとアラビア語なのですね。

アラビア語で、アラビアの人たちが初めに航海を始めて、船に乗って地中海へわっと出ていくことになるわけなのですけども、「リスク」という言葉は、もともと海図のない、海の地図がない航海ということの意味するのですね。

海図がない。つまり、何も、どこへ行くのか分からない。どこへ行くのか分からない船で、どこに行くのか。船に乗ってどこかにいきますということ、もともとは「リスク」という言葉で、アラビア語で言っていた。

それがラテン語に変わって、ギリシャ語になって、ラテン語になって、リスクという言葉は、今使われるように、リスク回避というような、危険がないようにというような言葉で使われるようになるわけなのですけども、リスク回避ばかりしていれば、大体、普通にはなっていくだろうと思います。

普通の人生というか、普通のルールに敷かれたといえましょうか、ルールの上に乗っているような、列車に乗ってどこまで行くんだよとかということがちゃんと分かっているようにしていくのだったら、それはもうリスクがない、リスクを回避した方が一番いいと思うのです。

でも、今の時代って何が起こるか分からない時代ですよ。コロナもありました。あのときにも、あたふた、我々はしましたよね。地震のときもそうだったと思います。

これから何が起こるか分からない、そういう時代になってきたときに、ルールの上に乗ってずっと行っていればよかったという時代はもう終わっているのではないかと思います。

そのときにどうすればいいのかというと、やっぱりさっき言いましたように、パッション、自分が何をしたいのか、自分の子ども、恐らく皆さんはお子さんを持っていらっしゃるか、教育に携わっていらっしゃる方が多いと思うのですけども、子どもたちにやっぱり情熱を与えるようにしなければ、次の時代をつくっていくことができません。

我々自身がリスク回避ばかりしていても、やっぱりそのままこの状態が続いていくだけであって、何かあったときにあたふたしてしまう。

子どもたちが、もしかしたら、次の時代をやっぱりつくってってくれるとするならば、子どもたちにリスク回避ばかりではなく、反対にパッション、情熱を与えられるような教育をしないといけないと思うのです。

そのためには何ができるかというと、色々な方法があると思いますが、1つの方法として、読書というのがあるだろうと思います。

今日も読書のお話をさせていただきますが、読書という言葉のもともとの意味、読書というのが何を意味しているのかというお話をしたいと思います。

変な字で皆さんにお渡ししている紙は、漢字で「読書」と書いてあります。

読者の「読」という字の、これは言偏です。言偏の部分です。

右側に「士」という、今はこう書いて、下のところに「売」というような漢字になってしまっておりますが、昔は、言偏がありまして、言偏に「士」が書いてあって、その下に「四」という数字のようなものが書いてある。そして、下に「貝」というふうに書かれています。

讀賣新聞という字の、讀賣新聞の昔の漢字はこういうふうに書かれていましたね、これが、昔の古い時代では、こういうふうに書かれていました。

これは言葉です。言葉。それに、言葉に、この「士」という、武士の「士」の部分足が書いてあります。

足を踏み出すとか、何かが進んでいくということを意味するのですが、その下に、これは網をかけるとかというようなときの、網をかけてお魚を捕ったりとかするときの「網」の字が書いてありまして、その下に、価値があるという意味で「貝」という漢字が書かれています。

何を意味しているかといいますと、価値があるものが網にかかってしまって、見えなくなってしまうですよ、それをこうやって引き出していくのですよ、足で進めて引き出していくのですよ。

どういう意味でというのは、言葉です。言葉で、価値があるもの、見えなくなっているものを引き出して、出してあげるんだという、それが読み解くという漢字のもともとの「読」という漢字なのですね。

なので、本を読むといっても、色々な読み方があると思いますが、何が書いてあるのか、読み手によって、それぞれ価値があるものは、僕にとってはここが面白かったよ、この人にとっては、ここが面白かったよといって、それぞれ一人一人読み取りの力というのは、深みというものも、それは人によって違うと思うのです。その価値というのは隠れてしまっているので、自分で引き出してこないといけない。

引き出してこないといけないが、それはどうやって引き出していくのかというと、やっぱり言葉で書かれていますので、言葉でもって、自分で書かれているものを引き出して、そして、もう一度、自分で言葉にしていける。

どういうところが面白かったのか、そういうことを人に、今度は「この本面白かったんだけど」「この本、役に立ったんだけど」と言って、また人に伝えていくようなことをしよう。それが「読」という漢字に隠されているもともとの意味なのですね。

読書の「書」の方も1つ説明しておきますが、上の方にこういう漢字が書かれています。これは竹冠をつけると「筆」という字になります。この筆という字の下のところに、今は、お日さまの「日」を書きますが、もともとは「子曰く」というような、「孔子が言いましたよ」「孔子先生が言いましたよ」というような言葉で、「のたまわく」と、昔、言われたように、人がしゃべっている言葉を筆で書いていたのが「書」と呼ばれるものですね。

だから、聖人君子とかと呼ばれるような人たちが何か言っている、この言葉、フレーズはとても大事というようなことを誰かが書き留めていた。それがまとまってしまうと、今度は本というものになっていく。

本というものは、先ほども言ったように、何か価値があるものなので、それを、でも、一言だけでは分からない。色々な人たちに、それぞれ、多面的な、多様な読み方がある。その多様な読み方を、「こんなふうな読み方もあるんだよ」「このようなふうな読み方もあるんだよ」と教えてあげるのが、恐らく教育なんだろうと思うのです。

でも、やっぱりお父さん、お母さんが本を読まなければ、子どもたちは本を読みません。というか、周りに本を読む人がいなければ、伝えていくことができないので、その伝え方が少しずつ、やっぱり電子書籍とか、新しいものになって変わってきているところではありますが、パッション、どういう読み方ができるのか、どういう情熱でどういう本を読んでいくのか。

昔は竹簡、木簡に書かれていたものが紙に書かれるようになって、本当は、昔は手で全部書かれていたものが印刷されるようになって、活字になって、そして、今はフォントになってしまった。

こうやって、色々な状況や印刷物の体裁とか、そういうものは変わっていくわけですけども、時代とともに読み方も変わっていきます。

でも、やっぱり本を読むことが楽しい、楽しさが新しい情熱に、次の時代の情熱に変わっていく。それは楽しさと同時に、楽しさといっても調べる楽しみもありますし、それから、共感する力、心を育てるためには共感力というのが必要になってきますので、どういうふうに世代を超えて共感させていくのか。

共感させるためには、教える側も受ける側も情熱がないとうまく合致していきませんので、みんなが熱い気持ちでもって、「この本、面白かったんだよ」と本当に伝えるためには、本当に読んで、本当に自分が面白いことを見つけていかないといけませんし、そうすることによって、リスクではない、本当の意味での新しい楽しみ、それから、海図のない旅に自分たちが出ていくことができるんだろうと思います。

板橋区では、皆さんもご存じのように、来月からボローニャ絵本展が始まりますが、新しい絵本がまた生まれてきます。その1冊の本を作るために、作者の人たちは、あるいは翻訳をする人たちは、すごい情熱をかけて一つ一つの言葉を選んで、次の時代に伝えていく言葉をつないでいっていらっしゃるんだろうと思います。

何十年も、こうやって絵本の時代というのはずっとずっと昔からつながっているわけですけども、板橋区というところで、世界に向けた絵本展ができるということ、我々が実際そういうことにすぐに関わることができるという場所にいられるというのは、子どもたちに、本当の意味で小さいときから本を読む情熱を伝えていくことができるんだろうと思います。

でも、絵本は読み聞かせるだけではなくて、やっぱりお子さんたち一人一人に声を出して読んでもらいたい。

五感、我々には、耳や口があったり、感覚、肌の感覚だったり、食感とか、色々な感覚があるわけですけども、本を読むことによって五感を鍛えていけるようにしたい。

ただただ読めばいいとか、筋が分かればいいとか、そういうことではなく、五感を、読むことによって、色々な感覚を鍛えていくことができるし、それを伝える言葉を我々は学ぶことができるんだ。次の時代に伝えていくためにも、おいしさとか、色々な喜びだとか、悲しみだとかを伝えていかないといけない。

その伝えていく力というのは、やっぱり言葉にあるんでしょうし、言葉は、ただただ、何かこう見ていると、やっぱり隠されている。表面的にお話をするのはできても、やっぱり1対1で話すのと、みんなとお話をするのとは全然違うように、やっぱり網掛け状態になって、価値がどこにあるのかというのは、一見してすぐには分からない。

それを引き出してあげる力というのが、本当の意味での読書力、本を読むことの楽しさを子どもたちに教えていくことではないかと思います。

時間がまいりましたので、これで終わりにしたいと思います。ありがとうございます。

(拍手)

教 育 長 山口委員、どうもありがとうございました。

続きまして、「読書率向上の坂を登る」について、中央図書館長から報告願います。

中央図書館長 私は、中央図書館長の山田と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

山口教育委員のお話につきまして、私たちの方から、子どもの不読率の改善、「心を育む読書の大切さ」「読書率向上の坂を上る」ということで、板橋区の現状と、なぜ子どもの読書活動が重要なのか、そして、教育委員会が具体的にどのようなことをしようとしているのかということについて、できるだけ分かりやすくお伝えしたいと思います。

現在、教育委員会では、子ども読書活動推進計画2030の策定作業を進めております。この計画は、子どもたちの読書率の向上だけではなく、子どもたちの未来を考えて作成をしております。

国の調査でも、子どもの不読率、つまり1か月に1冊も本を読まない子どもの割合が大きな課題となっております。令和6年度の区の調査と東京都を比べますと、残念ながら、不読率の方は東京都と比較して高い傾向にあります。

もう1つ、気になることがありまして、「読書が好き」というふうに答える子どもの割合が、年齢とともに減少していることです。小さい頃は本が好きだった子どもたちが、成長とともに本から遠ざかっているということが分かりました。

今、スマホやタブレットの時代で、なぜわざわざ本を読む必要があるのかと思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、子どもの読書活動の推進に関する法律第二条では、読書は言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身につけていく上で欠くことのできな

いものというふうに定義されております。

具体的には、読書には次のような意義があります。

まず、今、山口先生のお話にもあったのですが、共感力と情緒の発達です。

物語の登場人物の喜びや悲しみに共感したり、他者の気持ちを理解する力が養われます。これはSNSでのコミュニケーションでは得られにくい体験ではないでしょうか。

そして、知識と多様性への理解です。読書によって多くの知識を得たり、多様な文化への理解を深めたりすることができます。これは、将来、先ほど先生の話でもあったパッションのところになるかと思いますが、多様な価値観を持つ人々と共生していくための基礎となります。自ら学ぶ楽しさや知る喜びを体得して、さらなる探求心や好奇心を育む態度も培われていくと考えています。

子どもたちに、読むこと自体の楽しさ、充実感、満足感を得てほしいと考えております。そして、子どもの頃に読むことが楽しいというふうな経験をするすることで、生涯にわたって学び続ける姿勢が育まれていると考えています。

皆様も、立ち止まったときに、何かの一節に心が響くという、そのような経験はあるのではないのでしょうか。私自身も、正直、本をゆっくり読む時間が取れません。どちらかというと、読書よりも寝る時間の方が、今、優先されているかなと思っています。それでも、立ち止まったときに、やっぱりリセットしたいとき、心に栄養が欲しいときには、詩を読んだり、名言集をぱっと開いて一部分だけ読んだりすることもあります。

話は少しそれるのですが、私の祖母は新潟の米農家のお嫁さんでした。田畑を耕して、農作業の合間には、三条市という土地柄、金物作りの内職をしていました。そのような日常を過ごしてきた祖母なのですが、93歳の最後まで文字を書き、読書をしておりました。田舎に行くと、祖母が移動図書館で借りた本がいつもありました。思い返してみると、絵の描き方から小説まで、とても幅広く借りていたことを覚えています。

話がそれてしまったのですが、子どもたちも、今の変化が激しい現代社会を生き抜き、未来に向かっていくための言葉というものは不可欠だというふうに考えます。

子どもの頃の楽しかった経験や、読書をすることで得られたよい経験、生涯にわたる学習意欲やウェルビーイングにつながるのではないのでしょうか。

さらに、世代を超えた読書活動の循環が形成されるということも期待できるのではないのでしょうか。

読書率の現状と課題です。

本は感動や刺激を与えてくれますが、それはなかなか数値で表すことができません。しかし、読書率というものの指標を用いることで、どのくらい子どもたちが読書をしているかが分かります。

この読書率向上の坂を上っていくために、私たち大人ができること、それから、子ども自身ができることを考えていきたいと考えております。

本日の身近な教育委員会でお話しさせていただいているのは、読書活動を取り

巻く環境は、図のように多岐にわたります。

私たち教育委員会事務局においても、複数の所管が関わるテーマでございます。

単に「本を読みましょう」と子どもたちに呼びかけるだけでは、効果がないというふうに考えています。

では、私たちは具体的に何をしようとしているのか、ほんの一部ですが、お伝えいたします。

1 番目です。子どもたちの自主性を育む取組です。

子ども司書の活動や、板橋国際絵本翻訳大賞など、子どもたち自身が主体的に参加できるプログラムをたくさん用意しております。

これは単なるイベントではなく、挑戦してみたら楽しかった、うれしかったという背景を通じて、読書への興味を自然に育んでほしいというふうに考えております。

続いて、2 番目です。学校における取組です。

学校図書館を、子どもたちが積極的に利用したくなる魅力的な空間にする取組を進めております。

例えば、上板橋第二中学校では、図書館を学校の中心に配置し、手に取りやすいように陳列したり、居心地のよい空間にしております。こちらの学校図書館は、先週 19 日月曜日の日本テレビ「ZIP!」の中でも好事例として取り上げられました。

上板橋第二中学校は、一般社団法人文教施設協会が実施する優良学校施設表彰において「新しい教育施設部門」というものも受賞しておりまして、今後、改築予定の上板橋第一中学校、志村小・志村四中一貫校においても導入の予定でございます。

次に、3 枚目です。デジタル時代に対応した取組です。

紙の本だけにこだわるのではなくて、電子図書の充実にも力を入れていくことも考えております。

実際に電子図書館の利用状況は着実に伸びております。デジタルネイティブの子どもたちにも受け入れられつつあります。また、区立図書館がハブとなって、子どもたち、学校、地域の人材をつなぐ役割も担っております。

図書館サポーターとして、学校で読み聞かせを行っている方々も多数いらっしゃいます。これは行政だけではなくて、板橋区地域全体で子どもの読書環境を支える取組です。

私たち行政だけの取組では限界があります。子どもの読書習慣を育むためには、家庭、学校、地域の協力が不可欠だと考えています。

後ほどのグループディスカッションでは、読書を習慣づけるために、家庭、学校、地域でできることについて、皆様のアイデアやご意見をぜひお聞かせいただければと考えております。

最後になりますが、よい機会なので、私たちの宣伝をさせていただきます。

身近な地域図書館の利用はもちろんのこと、移転から 5 年目を迎える中央図書館にもぜひお立ち寄りいただきたいというふうに考えております。

中央図書館は、グッドデザイン賞と日本図書館建築賞を受賞しております。
本を借りる、本を読むだけではない、特別な空間を私たちは提供することをめざしております。

併設されているいたばしBOROニャ絵本館においては、先ほど先生の方からお話もありましたが、海外絵本が3万冊以上ありまして、世界に誇れる絵本館です。

気軽にそのような本を手にすることができるのは、板橋区ならではのと考えております。

そして、インスタグラムの中で図書館の日常の動画も配信しておりますので、ご覧いただければと思います。

本日は、ご清聴いただきありがとうございました。

(拍手)

教 育 長 ありがとうございました。
それでは、お2人からの報告について、教育委員から所感を伺います。
まず、小林委員、お願いいたします。

小 林 委 員 山口先生、それから、山田中央図書館長、ありがとうございました。
まず、山口先生の資料を拝見しまして、「パッション」という字が飛び込んでまいりました。パッションと読書はどういうふうにつながるのかなと、資料を最初に見たときには分からなかったのですが、お話を伺ってみますと、その「リスク」という語源のお話から、海図のない旅、調べる楽しさに必要な情熱というのは読書にも大事なんだなということを非常に分かりやすくお伝えいただきまして、ありがとうございます。先生のご研究の真骨頂と申し上げるべき漢字の解説というのも、とても分かりやすく、「読書」という言葉にはこのような深い意味があるのかと思いました。また、続く山田館長さんのお話は、山口先生のお話ともつながり、やはり共感力という言葉がありましたが、子どもたちの心を育む上でも、私たちのこれからの生活にも大事な読書というものの広がりを感じるお話でございました。 ありがとうございました。

教 育 長 それでは、野田委員、お願いいたします。

野 田 委 員 野田です。本日はご多用の中お集まりいただき、子どもたちの読書について皆さまと一緒に考える貴重な機会をいただき、心より感謝申し上げます。

私は保護者として、また教育委員として、これまで本委員会の取組に関わらせていただく中で、みなさまからのご意見に耳を傾けながら、家庭や学校の現場を訪れ、読書について日々考えてまいりました。

先ほどの山口委員のお話にもありましたように、音読の大切さ、そして言葉が持つ意味の深さを改めて実感いたしました。みなさまの中にも共感された方が多くいらっしゃるのではないかと思います。

現在は、図書館長からもお話がありましたように、身近に本があっても手に取る機会が減ってきているという現状があります。これは私たち大人も例外ではなく、本と触れ合う時間が後回しになってしまうことは非常に残念なことです。

そのような中で、教育委員会の取組として、学校の廊下や教室など、図書館以外の身近な場所に本を配置したり、タブレットを通じて文章に触れる機会をつくったりするなど、「いつでも、誰でも、平等に活字に触れられる環境づくり」が進められていることは大変意義深いことだと感じています。

私自身、小学生の娘がおりますが、日々音読に接する中で、「ただ意味が分かればよい」というだけではなく、「文章に込められた思い」や「作者の意図」にまで思いを馳せることの大切さを痛感しております。

特に中学年・高学年になってくると、書かれているとおりに読むということが難しくなってきます。大人でも、文字どおりに読むことは決して簡単なことではありません。音読に慣れていないと、自分の解釈で読んでしまうことがあり、私自身も娘の音読と一緒に読みながら聞いていると、「ここは違うのでは？」「こう書いてあるのでは？」と気づかされることがあります。

そのような気づきが「読み解く力」に結びついていきます。文章の形や語り口から、丁寧さや親しみといった語感を感じ取る力を養うことで、作者の思いを受け取ることができるようになり、読書を通じた子どもとの対話が生まれ、家庭の中にも温かい時間が流れるように思います。

このように、読書は子どもたちの心を豊かにするだけでなく、家庭や社会全体をも豊かにしていく力があると感じております。

このあとのグループディスカッションでは、みなさまのご家庭や学校での様子、お考えをぜひお聞かせいただき、今後の取組につなげていければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

教 育 長 それでは、善本委員、お願いします。

善 本 委 員 よろしく願いいたします。

まず、山口委員と、それから山田館長のお2人から、大変示唆に富んだお話をいただきました。ありがとうございます。

私は、40年以上、学校現場で仕事をしてまいりまして、私の教科の専門は国語ですので、国語教育の視点から、今日いただいたお話についての私の感想を述べたいというふうに思います。

この20年ぐらい、日本の国語教育というのは、読解力をつけるということを非常に重視して、なおかつ実用的な文章に対する論理的な読解力を高めることに、どちらかというと比重が置かれています。

小学校、中学校の国語の教科書を見ていただくと、今ここにいる大人たちが学んだときにはなかったような、グラフの読み取りであるとか、画像を通して比較するとか、そのような読解力を重視しているという側面があります。

もちろん、これらは非常に大事なことなのですが、例えば高等学校の国語の選

択科目には、今の学習指導要領で新しく「論理国語」と「文学国語」という科目ができて、どういことが起きているかという、理系の子たちは時間数が足りないで、論理国語だけ読む、文系の子は論理国語と文学国語の両方を学みたい現象が多くの学校で起きている。

そうすると、例えば本当に定番教材として、夏目漱石の「こころ」であるとか、中島敦の「山月記」であるとか、人の葛藤とか、心の痛みみたいなものを読み味わってきた作品を読まないで大人になる日本の子どもたちがすごく増えているという状況なのですね。

読解力を高める、論理的な思考力をつける、実用的な文章が読めるようになることはもちろん大切にしながら、やはりそういう意味で、学校でややおろそかになっている心を育むという部分を、まさに読書活動を通じて高めていくということが必要なと思います。

あと、私が、今、校長の立場で子どもたちによく話をしているのは、A I の時代と言われているが、A I には絶対できないことがある。それは共感すること。シンパシーを持つ、他者に対して、これはA I にはできないことだから、人間にしかできない共感力を高めていきましょうということで、いつも話しています。

そういう意味で、今日、山口委員からも共感力というお話があって、まさに読書を通じて共感力を高めていきたいというふうに思いますので、それをどうしたらいいかということを、今日、この後、しっかりと皆様と意見交換ができればなと思います。本当にありがとうございました。

教 育 長 それでは、以上をもちまして本日の身近な教育委員会第一部を終了いたします。

これまでの第一部の内容を基に、皆さんと一緒に、第二部のディスカッションを行いたいと思います。

それでは、5分、休憩を挟みまして、第二部を始めますのでよろしくお願いいたします。

午後 7時 05分 閉会